

海難防止標語

「出漁前 無口なオヤジが 着ろ！と言う」

海難事故体験発表

過去、私どもの団体で「漁船海難防止全道大会」を行った際に、海難事故体験発表して頂いた方の内容をご紹介します。

『事故を教訓にライフジャケットを義務化』

私はR管内のO漁協で漁船漁業を営んでおりますKと申します。本日は、第五回漁船海難防止全道大会（平成8年9月）の海難事故体験発表という事ではありますが、幸いにして私自身は海難事故を起こした事がございませんので、当組合における海難事故の例を踏まえ、海難防止に対する取り組みについて発表したいと思います。



私は、漁業を営んで18年になり、救難所員となってからは14年が経ちますが、その間に私共の組合では13件の海難事故があり3名もの尊い人命が失われました。その痛ましい海難事故の中でも特に記憶に残る事故は、平成5年の年も押し詰まった12月28日の事故です。

その日は南西の風が強く、前日の天気予報では荒れ模様になるという予報でしたが、翌日から市場も休みになるということから親子2人で出漁し、網を揚げ終わり僚船と共に帰港中、折からの南西の風が一層強くなり、前方を走っていた僚船が後ろの船の明かりが見えなくなったので不審に思い、船を旋回させて近づいたところ転覆しており、救助しようと試みたが漁具が散乱し、波も高く転覆した船に近づけず、救助を断念し我々救難所のもとに救助要請の無線連絡がきたというものでありました。

連絡を受けた私共救難所員は、取るものも取りあえず港に行きました。陸から約700メートルの肉眼でも確認できる所に漂流している2人を確認できましたので必ず救助できるものと確信致しました。我々救難所員はボートを出し救助に向かいましたが、漂流していた2人は、岩場の中に流されてしまいボートも近づけず、急拠海からの救助をあきらめ、陸からダイバーによる救助を試み、息子さんは救助することが出来ましたが残念な結果になってしまいました。

父親については、組合、救難所、消防、町内会による数週間に及ぶ必死の捜索にもかかわらず4年経った今でも発見出来ません。2人はいつもライフジャケットを着用しておりましたが、急いで出漁したため当日に限って着用しておらずこのような悲惨な結果になったものと思われます。

あの時、救助に当たり岸壁では家族の方々が見守る中、父さんと息子を助けてくれと私の胸倉をつかみすがって泣き叫ぶ母さんの姿が今でも脳裏に焼き付いております。

この事故以来、最近までは大きな海難事故もなく平和な日々が続いておりますが、事故があった直後ではライフジャケットを着用しよう等と意気が盛り上がるのですが、時間が経つにつれて海難防止に対する意識が薄れてきていると感じました。周りの仲間を見るとライフジャケットは着づらい、作業性が悪いと言って着用しない人が多くおりました。

自分の命は自分で守り、家族や仲間に迷惑をかけないためにもライフジャケットは必要なのです。

船に積んでいるだけでは何の役にもたちません。常時着用してこそ役立つのがライフジャケットです。平成5年のあの時もいつものように着用していれば、仮に最悪の場合でも未だ行方不明といったことにはなっていないと思います。

私はライフジャケット着用義務化の緊急動議を今年（平成8年3月）の組合総会において出したところ満場一致で議決されました。

今では組合員全員が操業中、航海中にかかわらず着用していると言って過言ではありません。

私はここでお集まりの皆様方にひと言申し添えたい事があります。

会議等でどんなにりっぱな議題を設けても、どんなにかっこいいことを言っても、命を落としてしまえば全てが無になってしまうということです。

また、他人に「海難事故を起こすなよ」、「ライフジャケットを着用しろよ」等と言うことは、その人への思いやりの心なのです。漁具の代替えは可能です。船の代替えも可能です。しかし命の代替えだけはどんなに逆立ちしても出来ません。

現在では、非常に着やすく、また作業性も良い、ライフジャケットも開発されております。

海難防止の第一歩は、まずライフジャケットを着用することであり「安全なくして生産は成り立ちません。」

先ほども申しましたが、自分のためにも家族のためにも、そして仲間のためにも、ライフジャケットを着用して安全操業に努めようではありませんか。

以上となります。

時が移り変わっても一旦事故が発生すると悲惨な状況となるのは変わりありません。

後から「あの時…すればよかった。」「…しておけばよかった。」と後悔しても「時すでに遅し」です。

その前に対策を講じ安全を確保しましょう。

海難防止標語

「タラシバと 思う後悔 時遅し」

